

令和2年度病虫害発生予察情報 予報第5号（7月）

令和2年7月31日
発表：福島県病虫害防除所

1 果樹

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	天候に注意しながら、定期防除を実施する。
	褐斑病	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年並であったが（±）、 会津では平年よりやや高かった（+）。	分生子が盛んに飛散する時期なので、天候に注意しながら、散布間隔が空きすぎないように薬剤散布を実施する。
	黒星病	中通り 会津	— —	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は、中通りでは平年同様発生が確認されなかったが（±）、 会津ではやや高く、果実でも発生が見られた（+）。	① 発病部位は伝染源になるため除去し、園外に持ち出して適切に処分する。 ② 薬剤散布は散布間隔を空けずに散布ムラがないように丁寧に実施する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	
モモ	灰星病	中通り	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	7月は降雨が続いたため、今後の発生に注意し、地方の防除暦に従い薬剤散布を実施する。特に収穫期の20日前頃から果実への感染がしやすい状態になるため、散布間隔を空けずに薬剤散布を実施する。（表下の記載参照）
	せん孔細菌病	中通り	—	多い	① 新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高く、発病葉率の高いほ場も見られた（+）。 ② 果実での発生ほ場割合は平年よりやや高く、発病果率がかなり高いほ場も見られた（+）。	晩生種で発生が多い場合は、地方の防除暦に従い薬剤散布を実施する。その際、収穫前日数に十分注意する。
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	園地を見回り、発生が多いほ場では、収穫後であっても薬剤散布を実施する。

ナシ	黒星病	全域	—	やや多い	①新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。 ②果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	①7月は降雨が続いたため、今後の発生に注意する。 ②発病部位は伝染源になるため除去し、園外に持ち出して適切に処分する。 ③7月28から29日にかけて降水量が多かったため、その前に止め散布を行った園地で、発生が多く、今後も降雨が続く場合、8月上旬に追加で薬剤散布を検討する。その際、収穫前日数に十分注意する。
果樹共通 (中通り: リンゴ、 モモ、ナシ 会津: リンゴ 浜通り: ナシ)	カメムシ類	全域	—	やや多い	7月3～4半旬のフェロモントラップ調査の誘殺数が、複数の地点で例年より多かった(+)。 リンゴでの果実被害発生ほ場割合は、中通り南部で平年より高かった(+)。 ナシでの果実被害発生ほ場割合は平年並であった(±)。	園地での飛来状況をよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤散布を実施する。
	ハダニ類	中通り 浜通り 会津	— — —	平年並 やや多い やや多い	リンゴ新梢での寄生ほ場割合は、中通りでは平年並であったが(±)、会津ではやや高く、寄生頭数の多いほ場も見られた(+)。 モモ新梢での寄生ほ場割合は平年並であった(±)。 ナシ新梢での寄生ほ場割合は、中通りでは平年並であったが(±)、浜通りではやや高かった(+)。	園地での発生状況をよく観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。

◎夏季せん定等の新梢管理により、通風・採光を良好にし、薬液がよくかかるように心がけましょう。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

モモ	<p>■果実腐敗性病害(灰星病、ホモブシス腐敗病)</p> <p>7月の連続的な降雨により、今後の感染拡大が懸念されます。収穫後の果実に発病が見られることもあるため、注意が必要です。</p> <p>収穫前の降雨により感染が助長されるため、収穫まで散布間隔を空けずに薬剤散布を実施しましょう。降雨の状況に応じて、晩生種では追加で薬剤散布を実施しましょう。</p> <p>病害虫防除所HP 病害虫ライブラリ 果樹の病害 モモの病害について モモ灰星病</p> <p>https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/120147.pdf</p>
----	---

2 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった（±）が、一部で発生程度の高いほ場が確認された（+）。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（+）。	①多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。 ②葉かび病抵抗性（cf-9）品種でも発病するレースが確認されているので注意する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ②施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意する。
	コナジラミ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ②ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（-）。	蔓延すると防除が困難なので、発生初期から防除を実施する。
	褐斑病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった（+）。	①発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 ②初期病徴は褐斑病と類似している所以注意する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	①低密度時から防除を徹底する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（+）。	①多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 ②品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。

	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	①気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 ②抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ ※過去5 年間の平均 値と比較	葉枯病	全 域	—	多い	発生ほ場割合は例年より高かった（++）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、例年よりやや高かった（+）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト（被覆栽培）	<p>■トマトかいよう病</p> <p>ほ場での発生を確認しています。本病は細菌病であり、種子や土壤中の病原菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害が拡大しないようにしてください。万が一ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。</p> <p>■トマトすすかび病</p> <p>巡回調査ですすかび病の発生が確認されています。すすかび病は葉かび病と病徴が類似しており、肉眼での判別は困難です。これらの病害は、多湿条件下で発生が助長されるので、換気を十分に行うとともに少発生時から防除を行ってください。また、薬剤防除を行う場合には、いずれの病害であるかを確認して薬剤を選択してください</p>
リンドウ	<p>■黒斑病</p> <p>本病の病斑は、葉枯病や褐斑病、灰色かび病と似ているので注意が必要です。高温多湿条件下で発生が助長され、高温日照不足の天候が続くと上位葉への進展が早くなる可能性があります。これまでの調査では、8月に被害が拡大する傾向があるので、多発前の予防散布に努めてください。</p>
野菜・花き共通	<p>■タバコガ類</p> <p>トマトやキクの新芽や果実の内部に潜り込んで食害します。現時点でフェロモントラップの誘殺数は少なく経過していますが、これまでの調査では8月上中旬に被害が拡大することがあるので、寄生や被害が見られた場合は速やかに防除を行ってください。</p> <p>■トマトハモグリバエ</p> <p>本種は、ウリ科、ナス科など多くの作物に寄生します。これまでの調査からキュウリやトマトでは、夏期以降に急激に増殖し、被害が拡大することがあるので発生動向に注意してください。</p>